

実習報告（基盤教育実習）

## 「伝え合う力」を高める発問の考察 —英語科における授業実践と検証—

岩元 正悟（授業実践探究コース）

### 【探究実習のテーマと設定の理由】

大学院2年間を通じた研究テーマは『「伝え合う力」を育成する英語科学習指導法の研究—教師による発問を通して—』である。外国語科は4技能（Listening, Speaking, Reading, Writing）を総合的に育成し、統合的に活用できるコミュニケーション能力の育成を目指しているが、「平成27年度英語力調査結果（中学3年生）」（文部科学省，2015）ではSpeaking, Writingについての言語活動は不足していることが指摘されている。また、同報告では生徒の英語学習に対する意欲についても課題が見られることが挙げられており、高校入試に対応できる英語力を身に付けることを目指す生徒が最も多いことが明らかになった。

英語科が目指すコミュニケーション能力を育成するためには、生徒の「伝え合う力」が重要だと考える。この「伝え合う力」を構成する諸要素（意欲、思考力・判断力・表現力、知識・技能等）のうち、まずは自分の考えや意見を伝え合いたいという意欲を高めることに焦点を絞り研究を深めたい。

基盤教育実習では、生徒の「伝え合う力」の育成を促進する発問という観点から、授業中に行われる教師の発問について、読解における3タイプの発問（事実発問、推論発問、評価発問）（Been, 1975）を基に分析するとともに、教師の発問とその発問に対する生徒の反応の関係を整理したい。そして、これらの分析を踏まえて生徒の「伝え合う力」を育むための発問の在り方を考察する。

### 【探究実習の研究目標】

- （1）生徒の4技能統合型の言語活動や英語学習に対する意欲について把握する。
- （2）生徒の「伝え合う力」の育成を促すために、どのような発問を提示するべきか検討する。
- （3）教師の発問を通じた「伝え合う力」を育成する授業を計画・実践し、その効果を検証する。

### 【探究実習の概要】

探究実習では、佐賀市立A中学校（以下、実習校とする）の2年生B学級（男子18名女子17名）を対象に計200時間の実習を行った。探究実習の概要については、以下の通りである。

#### 1. 生徒の4技能統合型の言語活動や英語学習に対する意欲の把握

探究実習では担当学級の授業にT2として参加し、生徒の活動の様子を近くで観察した。また、研究対象の学級では朝の会や帰りの会での声掛けや課題の添削といった学級経営の一端を担うことで、生徒が授業内外でどのような学校生活を送っているかについても観察する機会が得られた。活動の様子や授業実践について観察する傍ら、生徒の4技能統合型の言語活動や英語学習に対する意欲についてのアンケート調査も行った。

#### 2. 教師による発問の分析と検討

授業実践について観察しながら教師の発問を分析し、そして教師による発問としてどのようなものが想定されるかを検討した。先行研究（田中，2016）から教師による発問をYES/NO疑問文とWH疑問文に分類したうえで、Been（1975）による三つの発問のタイプ（事実発問、推論発問、評価発問）と田中（2016）による三つの発問の機能（対人関係機能、情報収集機能、意味生成機能）を基に発問を検討した。教師による発問の分析と検討を通じて、どの段階でどの発問を提示すると効果的なのかを

考えるきっかけが得られ、そして教師による発問を意識した授業観察を行うことができた。

### 【探究実習の成果と課題】

探究実習での成果と課題は以下のとおりである。

#### 1. 成果

（1）実習校の実態把握：探究実習で生徒の活動の様子を観察することで、実習校の全職員が実践している『学び合い』の学習形態を知ることができた。『学び合い』によって、英語を苦手としている生徒も他の生徒の助けを借りることで課題を達成している姿を観察することができた。

また、英語学習アンケートでは「あなたは英語の学習は好きですか」の質問に対して、好きだと肯定的に回答した生徒が67%いるのに対して、「あなたはどの程度まで英語を身に付けたいですか」という質問に対しては、58%の生徒が高校入試に対応できる力を身に付けたいと回答していた（図1参照）。これらの結果から、「伝え合いたいと思える英語学習」という今後の授業実践の在り方を方向付けるきっかけが得られた。

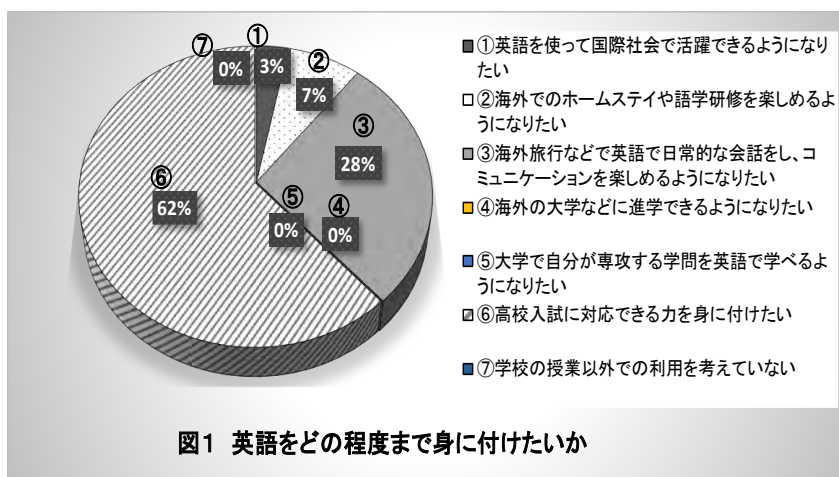


図1 英語をどの程度まで身に付けたいか

（2）教師による指示の重要性の把握：授業にT2として参加することで、教師の指示の重要性を学ぶことができた。『学び合い』で生徒がグループになって私語をしていた場面で、教師が「全員が課題を達成することが大事である」といった趣旨の指示や声掛けを行うことで、周りの様子を見ながら活動に取り組もうと変容する姿を観察することができた。また、学級指導の場面では集団と個人への指示のバランスの重要性について考えるきっかけを得ることができた。また、指示を出すときにすべての指示を教師本人が行うのではなく、総務係などの学級で役割を与えられている生徒が指示を行うことの重要性についても学ぶことができた。担当学級の生徒はそれぞれに学級内での役割が与えられていて、責任をもって役割を果たすことが求められるため、生徒に周りを見て声掛けをさせるように教師が促すことが重要になる。

#### 2. 課題

（1）「伝え合う力」を育成する授業の計画・実践：自らの研究の主題や計画を適宜修正しながら生徒の実態把握を重点的に行ってきたため、本来計画していた「伝え合う力」を育成する授業の計画・実践、そして効果の検証にまで至らなかった。今後の実習では今まで行ってきた実態把握を踏まえ、発問についての研究を授業実践レベルで検討する点や、場面設定と文脈設定についても授業レベルで検討する点に留意して進めたい。

（2）実習校の取り組みを通じた「伝え合う力」の育成の考察：実習校が取り組んでいる『学び合い』の学習形態と「伝え合う力」の育成のための指導をどのように関連付けていくかが課題として挙げられる。『学び合い』によって、「全員が課題を達成することができる」という意識作りは確実に行われているが、今後は生徒が主体的に活動する『学び合い』の場面で教師がどのような発問を提示するべきかについての検討が必要である。また、生徒が他の生徒と「伝え合いたい」と思えるような課題設定について、先行研究を基に整理しながら研究を深めていきたい。